

人生100年時代の楽しみ方

第6回

中高年の「読書の秋」

篠原 克周

フリーランスライター

ロンドンビジネススクールの教授、リンダ・グラットンが著した本『LIFE SHIFT—100年時代の人生戦略』が注目され、日本でも「人生100年時代」という考えが知られるようになりました。みなさんは、もし100歳まで生きるとしたら、どんな人生を送ってみたいですか。ここでは、人生100年時代を楽しむ、ヒントやアイデアを探ります。第6回のテーマは「中高年の読書の秋」です。

●そもそもなぜ「読書の秋」になった？

読書の秋です。そう言えば、なぜ「読書の秋」になったのでしょうか。由来のひとつとされるのが、中国の唐時代の詩人・韓愈（768～824年）の漢詩「符読書城南（符、書を城南に読む）」の中に出てくる一節です。

時秋にして積雨霽れ
新涼郊墟に入る
燈火稍親しむ可く
簡編卷舒す可し

これは「秋になり雨もあがり、新鮮な涼しい気が城外の村の家々に入り込むようになった。灯りに照らして読書をするにはいいものだ」というような意味です。この漢詩は、もともと韓愈が息子に読書の大切さ、学問の大切さを教えるために詠んだとされています。

この韓愈の漢詩を夏目漱石が引用しました。漱石は新聞に連載していた小説「三四郎」で、「そのうち与次郎の尻が次第に落ち付いて来て、燈火親しむべしなどという漢語さえ借用して嬉しがるようになった」とふれました。この影響力が大きく「秋は読書のシーズンだ」と一般にも知られるように

なったというのが通説です。ところが、調べてみると明治や大正時代に広まったという確証は薄く、「読書の秋」が使われ出したのは、どちらかというところと第二次大戦終了後、秋に「読書週間」が定着してから、という説に分がありそうです。

●「知恵」を体に沁み込ませる読書

さて、コロナ禍の影響もあり、自宅で過ごす時間が増え、この機会に読書をしようと考えた人も多いと思います。30代、40代の人なら、より多くの知識や情報を集め、スキルアップさせることを命題とし、仕事で役立つビジネス本やハウツー本を手にとることが多いのではないのでしょうか。

もちろん年を重ねてもそういう意欲は大切ですが、ここでは人生100年時代を見据えた読書という視点で、いくつかの書籍を紹介してみます。例えるなら「knowledge」（知識）より「wisdom」（知恵）を体に沁み込ませ「物事の本質を見通すための教養を身につける」というようなイメージです。もしかすると、これまで手に取り、途中まで読んで挫折してしまった名著・古典などがあるかもしれません。

まず「非常に読みにくい」と評判なのがフランスの社会人類学者・民族学者レヴィ＝ストロースが書いた『悲しき熱帯』です。1930年代にブラジルの少数民族を訪ねた「旅の記録」をまとめた紀行文という体裁を取っていますが、そこには人間への洞察や考察、隠喩や換喩、回顧談や回想、哲学的な思索がモザイクのように散りばめられています。文化人類学の古典とも言われる名著ですが、かなりの「本の虫」でさえ、読破するのに手こずる一冊としても知られています。



二冊目は、日本の禅を海外に広めた仏教学者・鈴木大拙の『日本的靈性』です。著者は、日本人の精神の根底には靈性(宗教意識)があると主張。それは鎌倉時代の禅と浄土系思想によって顕れ、その靈性的自覚が現在にまで及んでいると述べています。「生きるということは長く線を引くということではない」「生はどうしても無限でなくてはならぬ。すなわち直線であってはならぬ。生は円環である、中心のない、あるいはどこでもが中心である円環である」などの表現が出てきて、自分自身の生き方そのものを考えさせられます。

三冊目は、フランスの小説家マルセル・ブルーストが、30代後半から51歳の死の直前まで書いたとされる長編小説『失われた時を求めて』です。社交界の人間模様、祖母の死、恋愛心理、芸術に関する思索など、難解で重層的なテーマが一人称で語られるのですが、文章が个性的で、一文が長く、言い回しも独特なので、冒頭で挫折してしまう人が多いようです。また同書は「世界最長の小説」としてギネス認定されており、日本語訳では400字詰め原稿用紙10,000枚にも及ぶので、じっくり腰を据えて読む必要があります。

その他、現代の“生き仏”と称される大阿闍梨・酒井雄哉が著した『一日一生』は、人はなぜ生きるのか、どう生きるべきか、苦しみや死をどう受け止めれば良いかを平易な言葉で解き明かしてくれています。福沢諭吉の代表作『学問のすゝめ』は読んだ人が多いかもしれませんが、自叙伝の『福翁自伝』もおすすめです。野にあって独立不羈を貫いた精神の歩みが大らかに語られています。骨太の大作『銃・病原菌・鉄』を著したアメリカの進化生物学者、生理学者、生物地理学者のジャレド・ダイヤモンドは、30年以上に渡りニューギニアで

■おすすめの名著・古典

『善の研究』(西田幾多郎)
『ホモ・ルーデンス』(ホイジンガ)
『ギルガメシュ叙事詩』
『ハンムラビ「法典」』
『眠られぬ夜のために』(ヒルティ)
『現象学の理念』(E.フッサール)
『方法序説』(デカルト)
『論理哲学論考』(ウイトゲンシュタイン)
『論語』(孔子)
『君主論』(マキャベリ)
『武士道』(新渡戸稲造)
『三教指帰』(空海)
『自由からの逃走』(エーリッヒ・フロム)
『科学革命の構造』(トーマス・クーン)
『渋江抽斎』(森鷗外)
『源氏物語』(紫式部)
『平家物語』(作者未詳)
『種の起源』(チャールズ・ダーウィン)
『夜と霧』(ヴィクトール・E・フランクル)
『カラマーゾフの兄弟』(ドストエフスキー)
『陰翳礼讃』(谷崎潤一郎)
『死に至る病』(ケルケゴール)
『ゴッホの手紙』(ヴァン・ゴッホ)
『悪童日記』(アゴタクリストフ)
『ウォールデン 森の生活』(ヘンリー・D.ソロー)
『純粹現象学及現象学的哲学考案』(フッサール)
『金枝篇』(ジェイムズ・ジョージ・フレイザー)
『精神分析入門』(フロイト)
『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(マックス・ウェーバー)
『一般言語学講義』(フェルディナン・ド・ソシュール)
『チャーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷』(塩野七生)
『アンチ・オイディプス 資本主義と分裂症』(ジル・ドゥルーズ/フェリックス・ガタリ)

現地の人に交じり研究生活をしてきた人で、同書でピューリッツァー賞を受賞しています。

さて、ここではごく一部を挙げました。人生を見つめ直したり、知的好奇心を満足させたり、もしかしたら実生活には何の役にも立たない本かもしれませんが、それでも新しいことに興味を持つことで、生きる活力が湧けば御の字です。みなさんも、普段読まないような名著・古典を手に取り、ぜひ読書の秋を満喫してください。